

郷土を知り、郷土を愛する

志木市 歴史とんぼ

—— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 ——

第72回 長勝院のチョッピラリン

柏町の志木第三小学校の隣に昭和60年頃まで長勝院という寺がありました。

名前の由来は平安末期に田面長者藤原長勝が館を構えたことから長勝の二字が用いられたといわれています。創建は治承4年(1180)、地頭荏柄平太胤長が主君源頼朝の妻政子の安産祈願のために長勝の霊を祀り開基したという説や柏の城主大石氏の持仏堂を寺にした説などさまざまな異説があり、創建年代や開基者は定かではありません(志木市郷土誌より)。なお、跡地は新座市の普光明寺が所有しています。

「長勝院のチョッピラリン」は江戸初期の頃、江戸時代に入ってから二代目の長勝院の和尚、尊祐が住職だった時に起きたといわれる伝説です。その頃、この寺の近くに棲んで

いた狸が毎日のように寺にやってきては和尚さんをからかって長時間おしゃべりをするので、和尚さんはいささか辟易していました。

そのうちに懲らしめてやろうと思っていた矢先、寒い冬の晩、和尚さんが庫裏の囲炉裏のそばで暖をとっていると、小坊主に化けた狸がやってきました。いつものように、狸のおしゃべりは止めどなく続きました。和尚さんは狸との会話に疲れてしまい、囲炉裏の中で真っ赤に焼けていた石を狸の下腹部めがけて投げ込みました。

狸はあまりの熱さにびっくりし、戸外に逃げようとしたのですが、部屋から出るとき、振り向きざまに和尚さんに向かって「長勝院のチョッピラリン」と悪態をつきます。言われた和尚さんも負けじと「そういうお前こそチョッピラリンだ」と言い返します。その後、お互いに悪口の言い合いを繰り返しているうちに、狸は根負けして部屋から出ていきました。

翌朝、和尚さんが庭に出てみると大木の下で草むらに大火傷をした狸の死骸が横たわっていたというお話です。



▲嘉永6年(1853)刊行の「秩父日記」に掲載された長勝院



実りの秋、読書の秋

9月に入り、少しずつ秋の訪れを感じる季節になりました。読書の秋ともいわれるこれからの時季ですが、こども家庭庁の「青少年のインターネット利用環境実態調査(令和7年度)」では、青少年におけるインターネットの1日平均利用時間が前年度より約25分伸び、5時間27分と過去最長を記録。スマートフォンなどの電子機器を活用したSNSやAIなどの利用により、本や図鑑を活用して資料を調べることも減ってきており、読書離れが全国的な課題となっています。

志木市では、読書の大切さを子どもの頃から身に付けてもらうための取組を積極的に進めています。夏休みの自由研究や授業で取り組んだ作品を応募できる「志木市図書館を使った調べる学習コンクール」の実施をはじめ、市内小中学校図書館への指導や助言を行う学校図書館事業推進アドバイザーを柳瀬川図書館に配置するなど、子どもの読書活動を推進する環境を整えています。

こうした取組の成果もあって、全国学校図書館協議会

の調査(令和7年度)では、1か月間に本を1冊も読まない児童・生徒の割合(不読率)は、全国平均で小学生が9.6%、中学生が24.2%であるのに対して本市は小学生が3.77%、中学生が6.71%。読書習慣が身に付いている児童・生徒が年々多くなってきました。

また、本年3月には第四次志木市子ども読書活動推進計画を策定しました。「すべての志木っ子に読書の喜びを」を基本理念に掲げ、家庭での読書を習慣化する「志木っ子家読(うちどく)デー」を新たに毎月23日に設け、10月には、大きな活字や点字などのバリアフリーの図書を集めた本棚「りんごの棚」を柳瀬川図書館に設置する予定であり、すべての子どもたちが読書に親しむことができる環境を充実させていきます。

子どもの頃から読書を習慣づけることは、さまざまな情報があふれる中で「何が正しく、何が本質なのか」を見極める力につながるものだと私は思っています。

本での調べは、インターネットでの検索のように答えがすぐに出てくるわけではありませんが、本の重さを感じながら、ページをめくり、活字を追いながら時間とエネルギーを費やして得た知識は、しっかりと頭の中に刻み込まれていきます。

タブレットを使いこなし、紙のページをめくることも大好きな志木っ子。これからもそんな理想を形にしていきたいと思っています。